

電動化は飛行機にも、スイスでショーも開催

◆スイスで電気飛行機のショーを開催

2017年9月、スイス北部のグレンヒェン飛行場で、電気飛行機やハイブリッド飛行機による初の飛行ショー「スマートフライヤー・チャレンジ」が開催された。

参加者の顔触れは多彩で、12を超えるチームが参加し、シーメンスやエアバスのような欧州を代表する大企業から中小企業までが技術力をアピールした。シーメンスは、電気飛行機部門の責任者アントン氏が自らMagnus eFusion機を操縦して会場入りし、さらにシュツットガルト大学のe-Genius機などと共に、世界初の電気飛行機の編成隊ショーを繰り広げた。1～2人乗りの小型機で近距離なら、電気飛行機の実用化への道は見えてきた。長距離や大型機は厳しいが、エアバスは30年までに、短距離路線で最大100人乗りのハイブリッド機を検討している。

◆飛行機では、電動化で騒音の低減が大きなメリット

電気自動車の開発が注目されているが、飛行機でも電動化の動きがベンチャーから大企業まで活発化している。電動化のメリットとしては、飛行機では排ガスの問題よりも騒音軽減が挙げられる。今回のショーに参加した機体にも、サイレントやウィスパーといった名前が付けられている。電池の軽量化という課題は自動車と同様だが、コスト増は、そもそも飛行機自体が高価なため、自動車ほどは問題にならない。機体設計の自由度が向上し、空気抵抗の軽減も期待できる。たとえば、エンジンよりもモーターの方が小型化でき、分散配置も容易だからだ。

◆飛行機と自動車との垣根は低くなってきている

今回のショーのパートナーには、テスラなど電気自動車を手掛ける企業も名を連ねる。日本でも、17年5月にはトヨタ自動車が「空飛ぶクルマ」の実用化に向けて、社内の若手有志が中心となって進めてきたプロジェクトの支援を公表し、20年に「SkyDrive」実機を世界へ向けて披露することを目指している。

「モビリティ・サービス」という観点では、自動車と飛行機の垣根は、以前より低くなっているように思われる。

【赤山英子】